

【第2回大会報告】**第2回大会報告****◆第2回大会の開催報告****福田敏男**

大会長（名古屋大学）

新井史人

幹事（名古屋大学）

(News letter Vol. 2, No. 10)

平成9年9月18日（木）、19日（金）の2日間にわたって本学会の第2回大会を名古屋大学の豊田講堂及びシンポジオンで開催した。9月は台風シーズンであり、大会の実行を任された立場上、1週間前から天気予報が非常に気になった。久々の緊張感である。幸い、大型の台風に大会の前後を挟まれる形となり、直撃は免れた。逆に、大会開催期間は比較的穏やかな天候になった。天候にも助けられ、かつ多くの方々の協力により、順調にものごとが進み、大会は無事終了した。ここで、改めて関係者の方々に感謝いたします。

今回は第2回目であり、昨年の成功実績があったため、大会運営は昨年の運営方法を基本的に踏襲した。ただし、名古屋で開催する特色と、名古屋大学の地の利を活かそうと考え、特別講演は東海地区の方々をお願いし、名古屋大学の研究室見学会（オープンラボ）を企画した。初日の特別講演では名古屋大学の鳥脇純一郎教授に「バーチャルリアリティの医学応用—仮想化された人体をめぐる—」と題して、VRと医学との接点についてご講演いただいた。特に人体可視化の最新技術に触れ、VRが持ちうる可能性の高さと、今後の課題を認識することができた。翌日の特別講演では、岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー（IAMAS）の関口敦仁教授に「VRにおける芸術性の問題について」と題して、VRと芸術との接点についてご講演いただいた。芸術の分野では表現手段としてのメディアは時代に応じて変化し、多様性を増す。VRシステムにおけるリアリティと芸術におけるリ

アリティを比較しながら、VRにおける芸術性を論じた点は非常に興味深かった。また、最終日のオープンラボでは生田研究室、内川研究室、鳥脇・横井研究室、福田研究室にご協力いただいた。最終日の最後であったが、多くの出席者でにぎわった。

一般セッションは昨年同様、論文発表、実演発表、作品発表にわけて実施した。論文発表は98件、実演発表は6件、作品発表は4件であり、合計108件の発表がなされた。発表件数は昨年の件数を大きく上回り、この分野の成長ぶりが伺えた。また、登壇者の多くが20代であったことも、この分野を象徴しているといえる。発表時間は一律12分とし、その後の3分間で質疑応答を行ったが、活発な議論が多く、全体的には時間不足がちであった。実演発表や作品発表では、口頭発表はもちろん、展示も行った。このため、参加者が展示されたシステムや作品を実際に体験し、意見交換を行うことができたため、有意義であったと思う。また、企業展示では昨年を上回る16社にご協力いただいた。デバイス、センサ、計算機システム、ソフトウェアなどの最新製品が出そろい、活況を呈した。本大会が基調とする体験重視志向が十分に発揮できたといえる。展示にご協力いただいた企業の関係者の方々に心からお礼を申し上げます。また、技術展示をまとめていただいた、伊藤一男氏（スリーディー）に心から感謝いたします。伊藤氏の協力無くしては第2回大会の成功はあり得なかったと断言できる。

懇親会では学会のロゴマークの表彰がなされた。詳細に関しては別の機会に譲る。その後の催しとして、IAMASの大河内俊則氏らにより、最新技術を取り入れたコンピューター音楽をご披露いただいた。1つはコンピューターによる作曲で、もう1つはコンピューターと人間との協調演奏である。音楽の新しい表現方法と新しい楽しみ方に気づかれた方が多かったのではと思う。

今回の大会では合計281名の参加者があった。結果的に、昨年より参加人数は減少したが、発表件数、企業

展示ともに増加し、密度の濃い大会となったことは喜ばしい。関係者各位の協力も大きく貢献しているが、脈々としたエネルギーを感じたのは我々だけではなかったことと思う。今後の発展は疑う余地もないが、一人一人の研究活動がベースとなっていることを忘れずに、櫂を次に渡したい。来年の大会は北海道へわたることになる。平成10年8月20日(木)～22日(土)に北大でお会いできることを楽しみにしております。

◆第2回大会・展示を終えて

伊藤一男

スリーディー

(News letter Vol.2, No.10)

9月18、19日の両日、名古屋大学で開かれた第二回大会が無事終了しました。豊田講堂での展示も大きなトラブルも無く、展示担当としてほっとしています。これは、大会実行委員長である福田先生の責任感と幹事の新井先生の情熱と関山先生のガッツ、そして出展社(者)の行動力のお陰であると深く感謝する次第です。

ここで少し展示を振り返ってみます。

1. 企画、準備

昨年の第一回大会の経験があったので、今回はかなり余裕を持って企画、準備ができました。会場での打ち合わせが2回で済んだのも、昨年の経験と新井先生、関山先生の強力なバックアップ、そしてmailの活躍でした。

2. 出展社(者)数

作品・実演展示：10件、名大オープンラボ展示：4件、企業展示：16件でした。昨年の第一回大会に比べ、作品・実演展示の件数はほぼ同じ、オープンラボ展示は今回が初めて、企業展示の件数は昨年が8社でしたので、今回は倍増となりました。特に企業展示は昨年より1社でも多くとの意気込みで、企画段階で目標15社と決め勧誘活動をしました。費用的には出展費のほかに出張旅費などの経費がかかるのにもかかわらず、各社"VR学会の為に"と快く出展を決めていただいたことに、深く感謝いた

します。

3. 会場

第一回大会では展示会場の狭さが大変不評でした。図面に比べ実際の広さが少し狭かった為、その分企業展示にしわ寄せがいき、また会場を暗くしたせいか、まるでお祭りの夜店ようになってしまいました。

今回の豊田講堂の展示スペースは申し分の無い広さでコマ取りも余裕をもってできました。ただ、広すぎたため逆に暗くしなければならぬ展示への対応に頭を痛めました。幸い豊田講堂のステージを使用することで解決しました。最後まで右往左往したのは、電源容量の問題でした。昨年はATRさんにONYXへの電源容量が足りずご迷惑を掛けましたので、その教訓をと思ったのですが、今回は豊田講堂の電源容量がどの位あるのか電気図面、資料が無く"参った"と思ったのですが、名大お抱えの電気業者がいてクリアできました。しかも、工事費はかなり安くできました。

4. 来年の第三回札幌大会に向けて一言

来年は札幌です。ちょっと遠いかな、という気もしますが、行きたいなと言う気はもっとします。時間は何とかするにしても、交通費の工面と企業では上司への説得が大変でしょうか。へたをすれば上司自身が担当をさしおいて行ってしまいますから。うまくストーリー、仕組みを工夫しなければなりません。そして、出展社(者)数。今回以上になるとかなり厳しくなると予想されます。地元の企業にも出展をお願いするよう早目に勧誘された方が良いでしょう。それと、魅力ある展示にするには企業展示以上により多くの大学、企業の研究室の実演展示が必要ではないかと思えます。学会からの展示費用の補助も必要になるかも知れません。また、是非大学研究室と企業との合同研究、展示が今後増えてくることを期待します。

大会の企画、運営のノウハウも少しずつ溜まってきたと思えます。他の学会との大きな違いは色々な分野の研究者が集い、その研究成果の体験ができることではないかと思えます。今後とも、この大会が研究者にとっても、企業にとっても魅力ある大会になることを祈念します。数年後にはSIGGRAPHを凌いでいる？